

# 平成28年度山梨県南都留地域教育フォーラム提案書

第3分科会  
富士学苑中学・高等学校  
教頭 山口隆之

## 『地域に生かす』とは ～仏教の観点から～

### 1. はじめに

本フォーラム第3分科会のテーマである「地域に生かす」は、一見単純なようで実に深く難しい言葉です。

今回の提案では、この言葉について本校ならではの視点で掘り下げ、地域教育の根幹に迫ることを試みました。

一般的な実践報告とは趣を異にするものとなりますが、皆さんと一緒に教育の「足元」を見つめ直す機会になればと思います。

### 2. 富士学苑中学・高等学校の教育方針

富士学苑中学・高等学校の母体は臨済宗妙心寺派の月江寺です。その月江寺の名を冠する月江寺学園は、当寺住職山田秀峰先生により昭和32年に創立されて以来、幼稚園、中学、高校を擁する富士北麓地方唯一の総合的私立学校として、まさに地域教育の一翼を担ってきました。

その教育方針は当然のことながら、仏教の教えに基づくもので、それは校訓である「報恩・奉仕・精進」に端的に象徴されています。

### 3. 報恩・奉仕・精進とは

報恩とは、「恩に報いる」こと。

奉仕とは、「見返りを求めず他者のために尽くす」こと。

精進とは、「常に努力し自己を成長させる」こと。

### 4. 恩と縁

報恩における「恩」とは、自分が他者のおかげさまで「生かされている」ということを感じることです。

その実感に基づき、その恩に報いる意志を持ち行動することが報恩ですが、その際、勘違いしてはいけないことがあります。それは、「報恩」の対象は、決して自分自身が恩を感じたその人でなくてもいいということです。

普通私たちは、Aさんのお世話になって、そこに恩を感じると、Aさん自身に感謝の気持ちを表明したり、Aさんに金品を送ったりします。

もちろん、恩を受けた相手自身にその返礼をすることは、分かりやすく、また、最も大切なことと言えますが、仏教の考え方では、その対象はAさんでなくても良いということになっているのです。

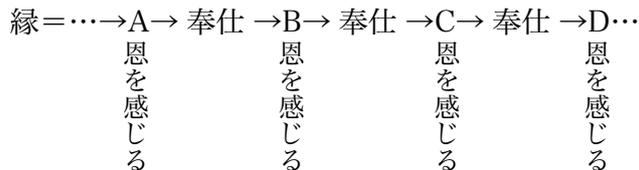
たとえば、私たちは親から多大な恩恵を得ていますが、なかなか親自身には恩返しはできず、結局自分の子どもに対して「自分が親にしてもらったこと」をします。

仏教では、それで良いし、それが普通だと捉えられています。

逆の視点から考えますと、親は子どもからの見返りを期待してはいけないということになります。ですから、親は子どもに対して「奉仕」をする存在と言えます。

「恩送り」という言葉がありますが、実際には「奉仕送り」が行なわれているのです。

そして、そのような自己と他者（人間に限りません）との関係を「縁」と言います。

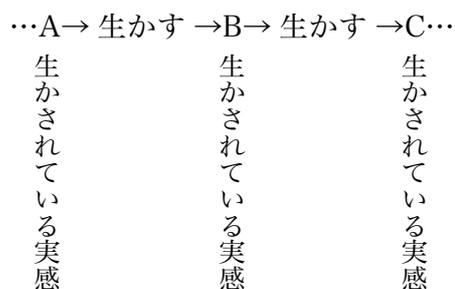


恩と奉仕が織りなす縁は、本校の教育の根幹をなす仏教的な真理です。このような仏教の観点から、まずは「生かす」という言葉について考えてみましょう。

## 5. 「生かされる」から「生かす」を考える

「生かされる」は言うまでもなく「生かす」の受け身形です。すなわち、「生かされている」ことに恩を感じ、その気持ちを「生かす」ために、私たちは誰かに奉仕しているのだとも言えます。

上の図で言うならば、BさんはAさんによって「生かされている」ことに恩を感じ、それを奉仕という形でCさんに「生かす」ことになります。その奉仕を受けて、CさんはBさんに「生かされている」と感じます。この流れをあらためて図示すると次のようになります。



このように、「生かし生かされ」の関係によって、「奉仕」を再生産するのがこの世の中の「縁」ということになります。

## 6. 学校と地域と生徒

ここで、学校と地域と生徒とが、どのような「縁」を結んでいるかを考えてみます。

言うまでもなく、基本的に学校は地域の生徒によって構成されています。地域の生徒が入学してくるということは、学校自体が地域（自治体としての、また地域に住む個人の集合体としての地域）に支えられている、すなわち「生かされている」ということになります。

当然、学校はそのご恩に報い、誰かに奉仕して（学校としての能力を生かして）いかなければなりません。

もちろん、その見返りを期待しない奉仕は、生徒自身に向けられることもありますし、地域に向けられることもありますし、地域を超えた国に向けられることもあります。

## 7. 「地域に生かす」とは

「生かす」ためには「生かされている」ことの実感が必要だと長々と説明してきましたが、ここでようやく「地域に生かす」という言葉について考えることにします。

上の説明からしますと、「地域に生かす」とは「地域に奉仕する」ということになります。そして、その前提として「他者に生かされている実感」が必要であるということになります。その「他者」は「地域」である必要はありません（もちろん地域であつてもかまいませんが）。

教育において、「地域に生かす」の主語は「学校」または「生徒」です。また、「生かす」の目的語は、それぞれ「学校自身」「生徒自身」であるべきです。

すなわち、教育現場において「地域に生かす」とは、次のようにまとめることができます。

・主語が学校の場合…学校が、他者（特に地域）に生かされていることを実感し、その恩恵に報いるために、学校自身の能力を地域に生かす。

・主語が生徒の場合…生徒が、他者に生かされていることを実感し、その恩恵に報いるために、自分自身の能力を（他者の一つである）地域に生かす。

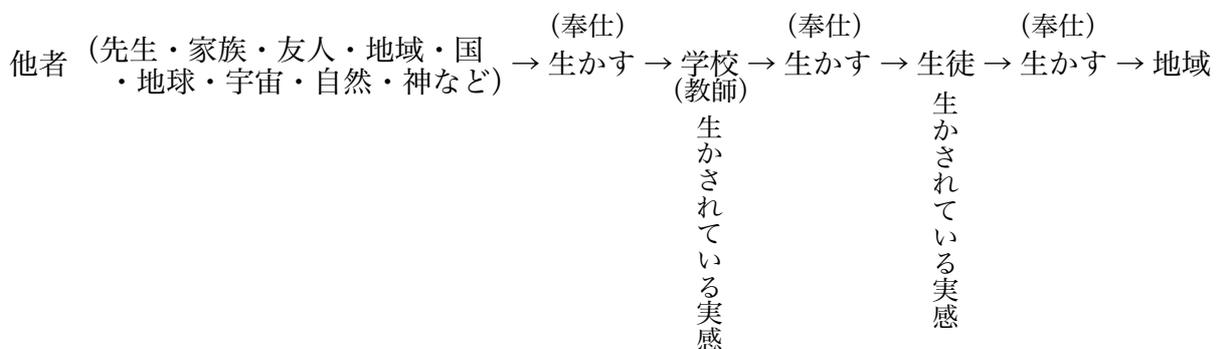
## 8. いかにして「地域に生かす」か

では、学校は生徒を通じて、いかにして地域に奉仕することができるのでしょうか。

最も重要なのは、上記のような「恩」と「縁」による奉仕の再生産を生徒に教えることです。

現代人は、経済的なものの考え方、すなわち労働の対価として賃金を得るという「give & take」の関係にとらわれがちです。教師や生徒もご多分に漏れません。

そこで、仏教的な「thank & give」の世界観を伝えることが重要となります。もちろん、教師自身がそのような価値観に基づいて行動しなければなりません。特に、教師の生徒に対する「見返りを期待しない奉仕」の姿勢が重要となるのは言うまでもありません。



## 9. 富士学苑が「地域に生かす」

上記のような意味において、本校はどのように生徒自身を「地域に生かす」ようにしてきたか、少し紹介します。

分かりやすい実践例としては、学園創立以来続いている「全校奉仕活動」が挙げられます。1年に2回行なわれる中高生全生徒による地域清掃活動です。

これは、地域によって生かされている実感を地域に返すという意味では、ある意味単純な活動であるとも言えます。

一方、目には見えにくいけれども、より本質的な「地域に生かす」教育活動があります。

それは、卒業生を「地域に残す」ための教育です。

昨今、特に高校の現場では、このような悩みを耳にします。

「優秀な生徒がいい大学に進学するのはけっこうだが、大学卒業後地元に戻ってこない」つまり、私たちの生徒への奉仕の結果が、他地域への奉仕につながってしまっているということです。

もちろん、広い視点で考えれば、彼らは日本のため、アジアのため、世界のために奉仕していることになると思いますが、やはり、私たちの生活圏内に優秀な人材が残らず、結果として地元地域の衰退を招くことになってしまえば、教育の本来の目的の一つからは、遠くかけ離れてしまうどころか、「恩を仇で返す」ということにもなりかねません。

そこで、本校では、仏教の教えに基づいた「恩」と「縁」と「奉仕」の教育をすることによって、そうした矛盾をなるべく避けようとしています。

## 10. 特進コース A 生徒の卒業後の状況

そうした本校の教育方針の成果の一つとして、特進コース A 卒業生の「現在」について紹介します。

特進コース A は、国立大学や難関私立大学を目指す少人数のコースですが、その卒業生たちは比較的多く地元に戻ってきています。

現在、大学や大学院を卒業して社会に出た特進コース A 卒業生は約 70 人になりますが、そのうち、医学部に進学した 4 名のうち、現在大学を卒業している 3 名は、全員山梨県内での就業や開業を目指し、現在県内で研修等を行なっています。

また、教員志望だった 7 名のうち、6 名は山梨県内で実際に教員になっています。

その他、山梨県内で教員以外の地方公務員となった者が 5 名、山梨県内の金融機関に勤務した者が 3 名、その他県内企業に就職した者も多数おり、まさに「地域に奉仕」「地元貢献」という形になっています。

## 11. 教育の根幹

以上、仏教の観点から「地域に生かす」という言葉について考えてきました。

こうした視点で私たちの「足元」を見直すと、教育の根幹が再確認できます。

私がこの提案を模索しながら、気づかされたのは次の三つのことです。

- ・教育の原点は見返りを期待しない奉仕の心である。
- ・(恩着せがましくしてはいけませんが)「恩の種」を生徒に植えるのが教育である。
- ・学校は地域に生かされているのだということを忘れてはならない。